

出雲市埋蔵文化財調査報告書

第 2 集

1989年3月

出雲市教育委員会

出雲市埋蔵文化財調査報告書

第 2 集

1989年3月

出雲市教育委員会

はじめに

出雲市は、県下でも有数の文化財の宝庫です。これらは、貴重な文化遺産として活用を図るとともに、将来にわたって保存していかなければなりません。

しかし、最近の開発ブームはとどまるところをしらず、貴重な文化財も少しずつ破壊されてきています。

昨年度、出雲市埋蔵文化財調査報告書を発刊し、貴重な埋蔵文化財のいくつかを、記録として残すことができました。今年度も、ここに第2集として発刊の運びとなりましたが、今後もさらに埋蔵文化財保護行政を推進するための一助として、刊行してまいりたいと思っております。

本書を発刊するにあたり、ご指導、ご尽力を賜わりました皆さまに、心からお礼申し上げます。

平成元年3月

出雲市教育委員会

教育長 石飛満

例　　言

1. 本書は、出雲市教育委員会がこれまで実施した調査等のうち、未報告のものの一部についてまとめたものである。
2. 本書の執筆、編集は山雲市教育委員会が行なったが、図面の一部については、島根県教育委員会文化課の西尾克己、角田徳幸の両氏の協力を得た。
3. 磁輪の蛍光X線分析については、奈良教育大学の三辻利一氏から玉稿を賜わった。記して謝意を表します。

目　　次

1. 大寺三藏遺跡	1
2. 回田谷遺跡	7
3. 廣瀬占墳	10
4. 山地古墳の壺棺	13
5. 出雲西部地域の占墳出土磁輪の蛍光X線分析	17

1. 大寺三藏遺跡



図1 大寺三藏遺跡位置図

大寺三藏遺跡は、出雲市東林木町にある大寺谷の入口にあり、南には湯屋谷川が谷を横切るように東に流れている。北には万福寺があり、東の尾根上には、島根県内で最も古い前方後円墳である大寺古墳が築かれている。

現地は、山水が溜る低湿地であり、稻作に不適で、果樹への転作も一部で試みられたが成果が得られず、殆んどが休耕地になっている土地である。

かつて、この扇状地の扇尖部の市営住宅からは古瓦が出土し、現在出雲市教育委員会で保管している。この古瓦は、径16cmの素弁蓮花文軒丸瓦で、中房に蓮子があり、



写真1 遺跡現況

花弁は十字状に素弁を4葉配している。この瓦当面の文様と全く同じものが、松江市山代町の四王寺跡から出土している。また、本遺跡の北端には、万福寺の境内に収蔵庫があり、内部に薬師如来像をはじめとする重要文化財に指定された仏像群が整然と配置されている。これらは、現在地より谷奥に存在していた大寺と号す寺院にあったが、慶安年間の山崩れで破壊された堂宇から現在地に移したものと伝えられている。

本遺跡は、この地に出雲市森林組合チッププラント工場が建設されることになり、試掘調査を行なった結果、存在が確認されたものである。

試掘調査には、島根県教育委員会からト部吉博主事（現在は埋蔵文化財第三係長）の協力を得て、出雲市教育委員会が昭和57年2月11日に行なった。開発地内に7カ所のトレーンチを任意に設定して、遺構の存在、遺物の出土状況等、について調査した。その結果、トレーンチ内からは、土師器、須恵器、土師質土器をコンテナ1箱分出土している。

第1トレーンチは、 $1 \times 5\text{ m}$ の南北に細長いトレーンチで、開発地の北西隅の畠地に設定している。層序は、耕作土（層厚 0.7 m ）の下に粗砂が 0.2 m の厚さで堆積し、さらにその下に灰黒色粘土が 0.5 m 以上あるが、粘土層の下端は確認していない。トレーンチでは遺構は検出されなかったが、遺物としては耕作土の最下部から、土師質土器10個体程度が重なるようにして出土しているほか、粘土層からは須恵器の片などが少量出土している。

第2トレーンチは、 $1 \times 4\text{ m}$ の南北に細長いトレーンチで、第1トレーンチの東側の畠地に設定した。層序は、 1 m の耕作土の下に 0.6 m の灰黒色粘土があり、その下は砂層になっている。このトレーンチからは、中央と南西寄りに径 10 cm の柱跡が認められた。それらは 1.2 m 離れているが、性格は不明である。遺物は、本遺跡のトレーンチのなかでは第1トレーンチ



写真2 大寺三藏遺跡（開発前）

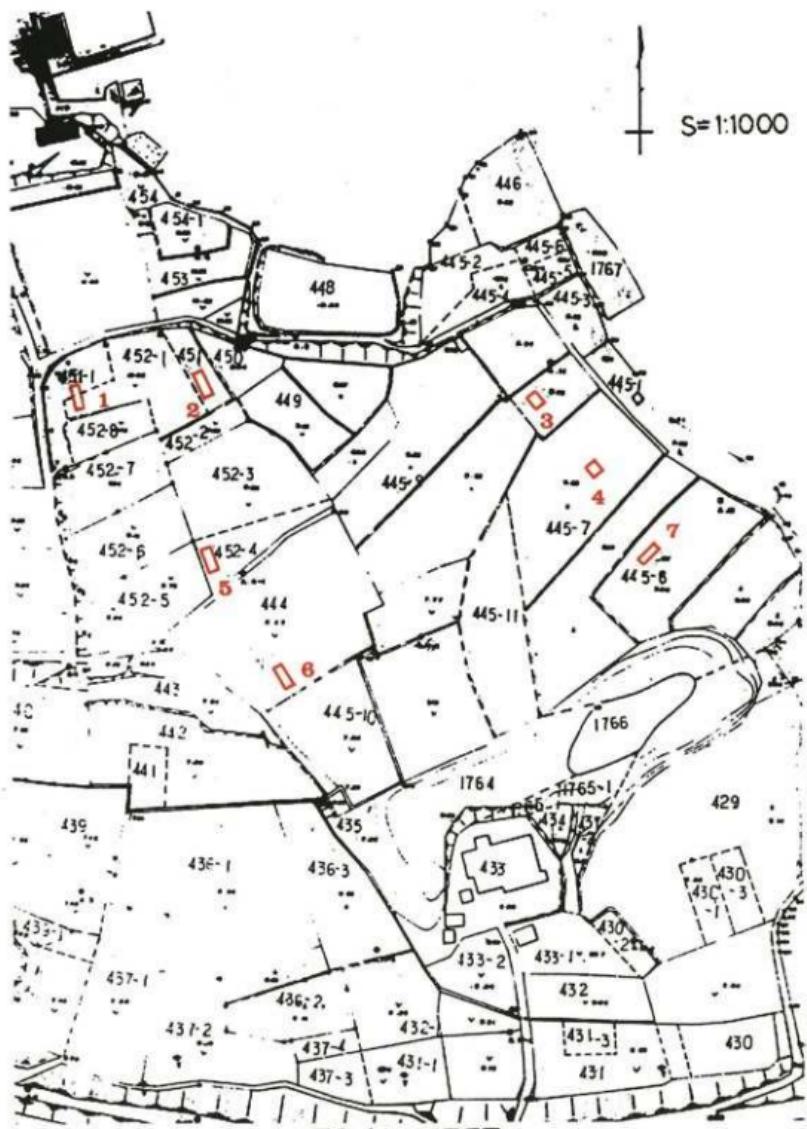


図2 トレンチ配置図

とともに最も多かったが、土師質土器が多く、須恵器が少しある。土師質土器は、高台の坏や底部に糸切りのある坏などが粘土層の上部から出土し、下部からは高台のついた須恵器の坏などが出土している。

第3トレンチは、開発地の北東部に設定した $1.5 \times 1.5\text{m}$ の規模のものである。層序は、耕作土(0.8m)の下に灰黒色粘土が 0.6m 堆積し、その下は 0.1m の細砂をはさんで粗砂になっている。遺構としては、南端から径 0.9m の落ち込みが検出されたが、ピットであるかどうかは判断したい。このトレンチからは、少量ではあるが、底部が糸切りの須恵器坏などが粘土層から出土している。

第4トレンチは、第3トレンチの南側に設定した同規模のトレンチである。層序は、耕作土(1m)の下に 0.4m の厚さの粘土があり、その下は粗砂になっている。遺構



写真3 試掘トレンチ（一部）

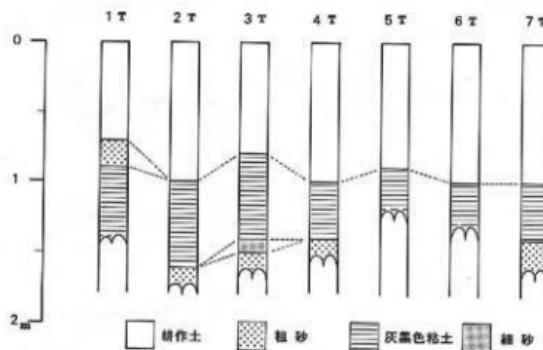


図3 トレンチセクション図

は全く検出されず、遺物も殆んど出土していない。

第5トレンチは、第2トレンチの南側に設定した $1 \times 3\text{m}$ のトレンチである。層序は、耕作土(0.9m)の下に粘土があるが、 0.3m までしか確認していない。トレンチから遺構は検出されなかつたが、遺物としては土師質土器や須恵器の壊が少量出土している。

第6トレンチは、第5トレンチの南側に設定した同規模のトレンチである。層序は、耕作土(1m)の下に 0.3m 以上の粘土が続いている。遺構は検出されなかつたが、須恵器壊などが微量出土している。

第7トレンチは、第4トレンチの南側に設定した $1 \times 3\text{m}$ のトレンチで、層序は耕作土(1m)の下に 0.4m の粘土があり、その下は砂になっている。ここでも遺構は検出されず、遺物も殆んどない。

遺物のはほとんどは、須恵器の壊と、土師質土器の壊である。土師質土器壊(図4-1、2)は、第1トレンチから出土した底部に回転糸切り痕を残すものである。土師質土器壊(図4

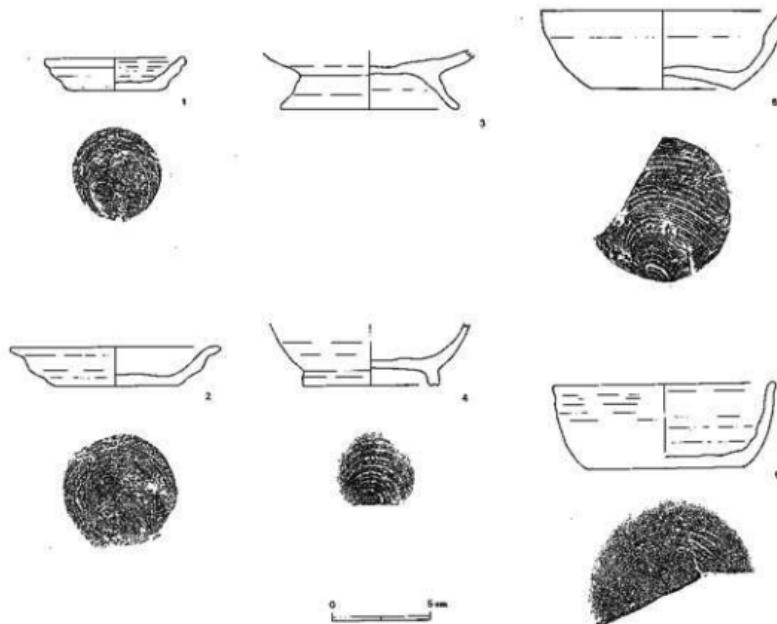


図4 大寺三藏遺跡出土遺物実測図

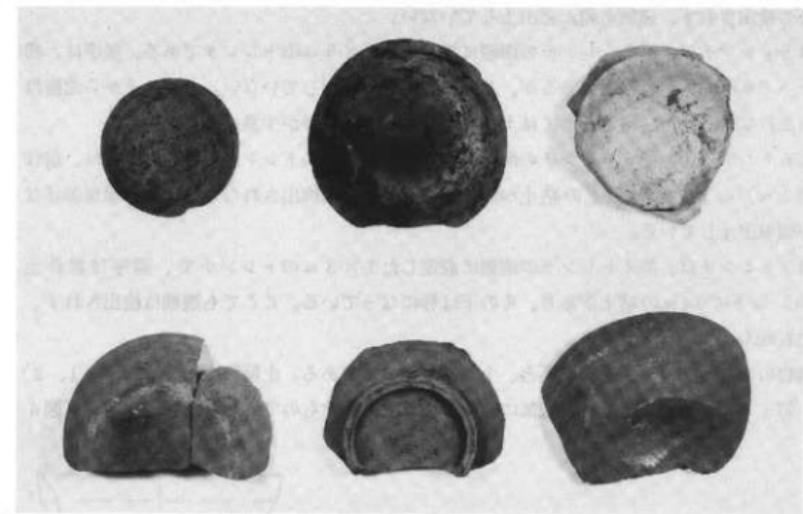


写真4 出土遺物

- 3) は、底部にハの字状に開く高台のつくるもので、回転ナデで調整している。須恵器壺(図4-4)は、底部を糸切り手法によって切り離したのち、低い高台をつけている。須恵器壺(図4-5)は、体部がやや内湾気味に立ち上り、そのまま口縁部にいたるもので調整は体部が内外面とも回転ナデ、底部をかなり上げ底の回転糸切りで仕上げている。図4-4の壺と同じく第5トレンチから出土しており、時期は柳浦編年第4式に相当すると思われるものである。須恵器壺(図4-6)は、第6トレンチから出土した遺物で、調整は図4-5と同じである。

こうしてみると、耕作土の下に粘土層が広がっているが、この層に含まれる遺物は、時期的には、奈良時代から中世にわたっている。この粘土層は、層厚からみて、北に厚く南にいくにしたがって薄くなる傾向にある。低湿地であることを裏付けるように、地下水位が高くグライ化しているが、遺跡の営まれた当時の環境は、これと異なっていたであろう。遺物の出土は、第1、2、5トレンチのある大寺谷の中央付近に多く、南や東の尾根付近からは殆んど出土していない。このことから、大寺三藏遺跡の中心は大寺谷の中央部すなわち、扇頂部付近にあると推定される。また、高浜川遺跡、里方別所遺跡、龍善寺東遺跡等、北山山麓の各遺跡から出土する遺物が本遺跡と時期的に重なっていることは注視する必要があろう。

2. 回田谷遺跡



図5 回田谷遺跡位置図

回田谷は、出雲市芦渡町にある南から北に向って開析された小さな谷で、線刻壁画で有名な深田谷横穴の東に所在する。この谷のやや奥まったところにある大野靖氏宅裏からは、かつて勾玉1点と土師器の高杯2個体が出土しており、現在同氏宅に保管されている。出土遺物は、裏庭の湧泉付近から発見されたらしいが、現地を調査した限りでは他の遺物の散布を確認することができなかった。

南部広域農道が同氏宅のすぐ南を東西に敷設されることになったため、昭和60年7月24日にトレンチ3本を設定して発掘調査を実施しているが、その折にも遺構、遺物は全く検



写真5 遺物出土地近景

出されていない。

出土遺物のうち、勾玉(図7-1)は、滑石製で色調は暗深緑色を呈し、両面の周縁と背部に研磨したときの稜が残っている。長さ2.6cm、中央部の幅1.1cm、厚さ0.7cmの大きさで、頭部にある径1mmの穿孔は両面からなされている。

滑石製勾玉のほかには、土師器高坏が2個体出土している。高坏(図7-2)は、脚部のみで坏部を欠いているが、残存高4.5cm、底径4.1cmで、脚部は下にいくにつれて大きく開いている。器表は、全体に風化が進ん



図6 遺跡付近地形図

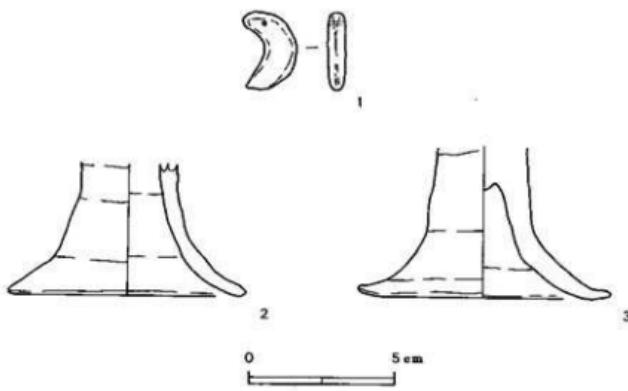


図7 出土遺物実測図

であり、調整は不明である。胎土は疎で、焼成も不良である。高坏(図7-3)は、暗赤褐色を呈し、残存高5.1cm、底径4.3cmである。図7-2の高坏と形態がよく似ているが、脚部が大きく屈曲して外反するものである。器表が全体的に風化し、調整は不明である。胎土は疎で、焼成も不良である。

これらの出土遺物は、その遺物構成と出土状態からみて、おそらく湧泉を対象とした祭祀に使用されたものと考えられる。



写真6 出土遺物（勾玉）

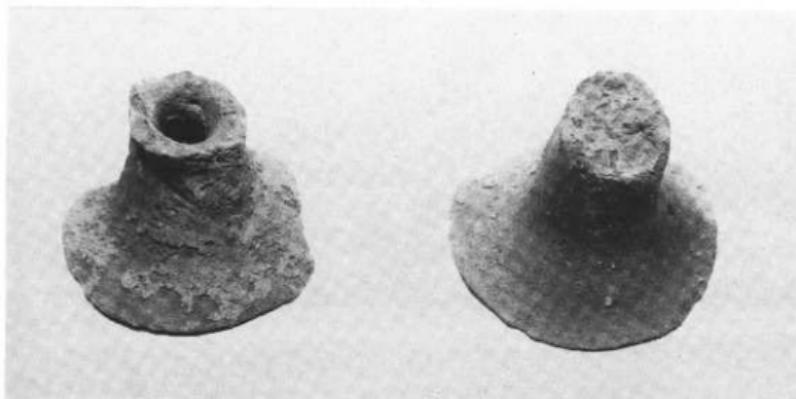


写真7 出土遺物（土師器）

3. 廣瀬古墳



図8 廣瀬古墳位置図

廣瀬古墳は、北山山麓の出雲市東林木町大寺谷の谷奥にあったが、現在は消滅している。同地は万福寺の北方300mにあり、かつて大寺が堂宇を構えていたと伝える付近にあたる。現在は松林になっていて、緩やかな傾斜地には草が生い茂っている。

明治時代の中頃、園山勝右衛門氏が松林を開墾したときに、勾玉が2点出土しており、園山敏次氏の手を経て今は園山武雄氏が保管している。

現在、同氏宅には、明治26年7月下旬に祖父の園山勝右衛門氏が所有地を調査したときに描いた絵図が残っている。園山武雄氏所蔵の勾玉2点のうち、1点を納めた木箱の蓋の



写真8 大寺谷近景

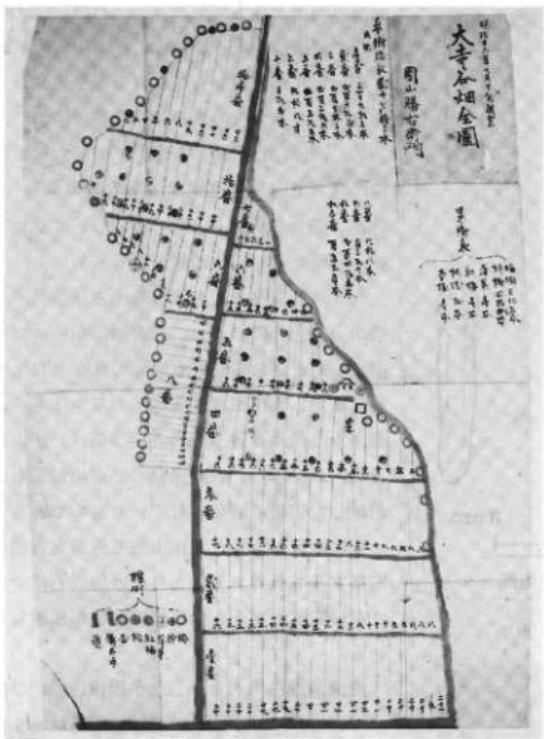


写真9 大寺谷明治古絵図

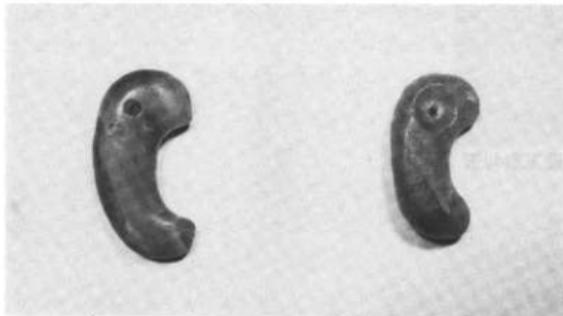


写真10 出土遺物

裏書きに、「大寺谷池ノ上ノ畠ヨリ出土」となっており、これはかつて同氏がいい伝えをもとに記したものではあるが、子供のころ絵図中の5番は池になっていたとのことで、6番から7番あたりから勾玉は出土したらしい。その池も昭和初期には埋められ、終戦後まもなく田や畠も放棄して松林になり現在に至っている。

廣瀬出土の勾玉は2点ある。勾玉(図9-1)は、長さ3.0cmで、色調は不透明の薄い黄赤褐色を呈した赤めのう製である。頭部中央にある径2.5mmの穿孔は片側からなされていて、もう一方は径2mmの穴のまわりの径8mmが少し凹んで欠けている。両面に研磨のときにつけた穂があり、腹部はかなり磨かれ光沢がある。収納した小さな木箱の蓋の裏に、「大寺谷池ノ上ノ畠ヨリ出土」とある。勾玉(図9-2)は、長さ3.5cmで、色調はやや半透明の薄い黄赤褐色を呈した赤めのう製である。

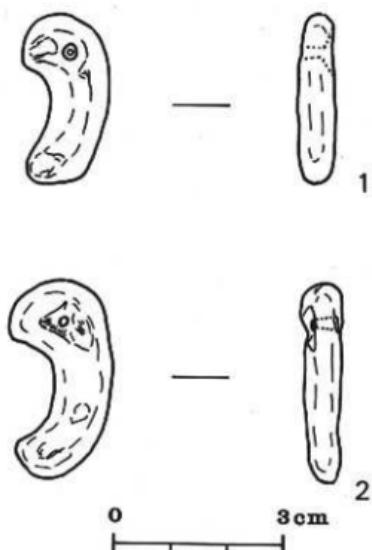


図9 出土遺物実測図



写真11 田淵出土硬玉製勾玉

前掲の勾玉よりもやや大きく、石材にはタテ方向に縞模様が入っている。頭部中央には径3mmの穿孔が片側からなされており、もう一方は径1.5mmで穴のまわりを不整形に欠いている。両面には研磨したときについた稜が周縁に残っている。収納した木箱の蓋の裏に「大寺谷ノ畠ヨリ出土」となっており、2点とも同一場所からの出土遺物であるらしい。

勾玉は、東林木町の平林寺山古墳群第8号墳から出土しているし、同古墳群からかつて出土したとされるものも地元で保管されている。また、園山武雄氏所蔵品のなかにも、田淵出土と伝える硬玉製勾玉（写真11）が1点ある。おそらく、廣瀬発見の2点の勾玉も、消滅した古墳に副葬されていたものであろう。

東林木町付近は、北山山麓でも最も古墳が密集する地域であり、とりわけ箱式石棺や小さな横穴式石室をもつ小規模古墳が卓越している。

廣瀬消滅古墳もそうした小規模古墳のひとつであったろうが、この地域の調査はあまりなされていないので、今後の調査によっては、かなりの古墳が発見される可能性もある。

4. 山地古墳の壺棺



図10 山地古墳位置図

山地古墳は、出雲市街地から西へ約7km離れた神西沖町に所在する。西に眺望のきく小丘陵上にあり、すぐ眼前には神西湖が広がっている。

この古墳は、採土工事に伴う事前発掘調査によって発見された。調査の結果、三つの埋葬施設をもつ前期古墳であることがわかった。第1埋葬主体は木棺直葬で、筒形銅器、二神二獸鏡、管玉などが出土した。第2埋葬主体は疊床を有する木棺で、筒形銅器、珠文鏡が副葬されていた。第3埋葬主体は箱式石棺であるが、遺物は出土していない。筒形銅器は、島根県内からは初めての発見であり、県内外から注目をあつめた。しかし、発掘調査の後、



写真12 山地古墳近景（開発前）



写真13 壺棺出土状況（西から）

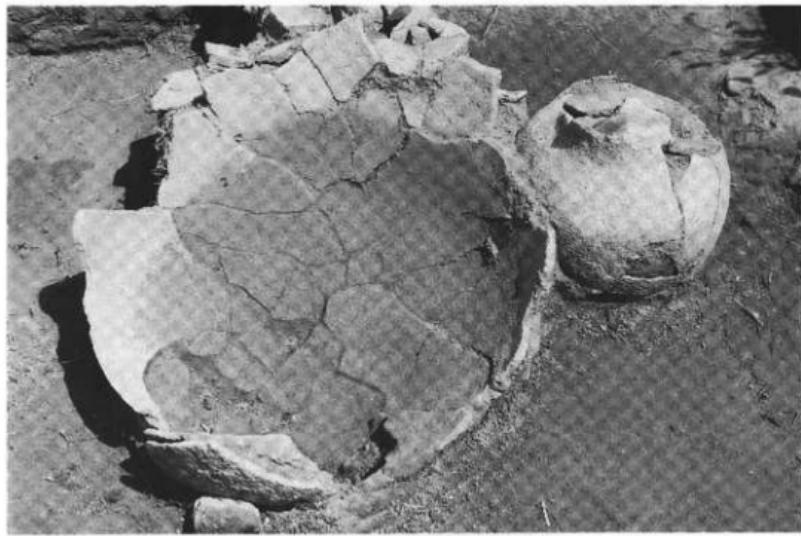


写真14 壺棺（排土後）

採土工事によって消滅し、今はその姿を見ることはできない。調査後、「山地古墳発掘調査報告書」を発刊しているが、壺棺については実測図を載せていなかったので、ここに追記しておきたい。

山地古墳の北側尾根上からは、調査によって壺棺と古式土師器が出土している。これらは、本調査に入る前のトレンチ調査によって部分的に破片が確認されていたが、当初は山地古墳のある丘陵頂部から流れてきたものであろうと考えていた。しかし、発掘調査が進むにしたがって、原位置に埋置されたものであることが判明したものである。さらに、壺棺に密着した状態で、器高42cmの古式土師器が据え置かれていた。

壺棺と古式土師器は、やや不整の 0.75×1.1 mの墓壇に南北に並置されていた。

北にあった壺棺は、器高約1m（推定）の大きな土器で、上半分が破碎されその破片の殆んどが内部に落ち込んでいた。残存していた底部から胴下部にかけての状態からみて、埋納角度は水平面から35~40°の斜位であったことが推定される。

壺棺は、複合口縁をもった古式土師器である。口径は50cmもあり、直立した口縁部幅8cm、口縁端部はやや平らで、下端の段部を横方向に少し突出させている。大きく屈曲する下頭部に、幅1.3cm、高さ2cmの突帯を繞らせている類例の少ない土器である。頭部から上は内外面ともヨコナデ調整し、その下は内外面とも横方向のハケメを施している。焼成はよく、淡橙色を呈するが、器表はかなり磨耗している。頭部に突帯を繞らす土師器は、古墳時代前期の中頃に築造されたと推定されている松本1号墳（全長50mの前方後方墳）の前方部から発見された壺棺などに類例を求めることができる。

壺棺の南側に並置された土師器は、口径21cm、器高42cmの複合口縁をもった古式土師器で



図11 壺棺実測図（一部）

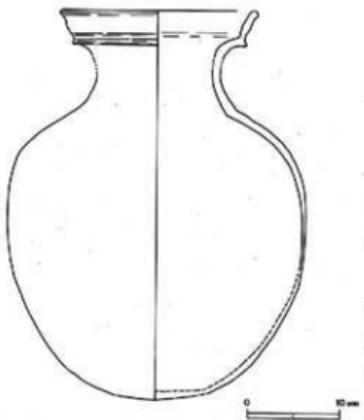


図12 古式土師器実測図

ある。器表は、かなり磨耗して脆くなっているが、胸部が丸く張り出し、そのまま丸底の下底にいたる土器である。口縁端部はやや平坦で、下端の段部は横方向に突出している。頸部から上は、内外面ともヨコナデ調整し、それから下の内面にはケズリを入れている。

これら2点の土師器は、同一墓塚内から並んで出土し、土器型式からみても概ね小谷式とされるもので、同時に埋置されたものと推定される。小さな古式土師器の内部の土は分析していないが、直立して並んだ状態で出土していることからみて、壺棺に供献されたものではなく、むしろ壺棺の被葬者にかかわりのある幼児等、を葬っている可能性が強い。



写真15 山地古墳跡地現況（西から）

出雲西部地域の古墳出土埴輪の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

1) はじめに

須恵器のように焼成には登り窯を必要とする土器は窯跡、あるいは、窯跡群を母集団として化学特性を整理することができる。したがって、遺跡出土須恵器の化学特性を母集団に対応させることによって産地推定は可能となる。

他方、弥生土器や土師器のように登り窯で焼成しなかったものは窯跡が残っていないため、母集団を設定することは容易ではない。当然、産地推定は困難になる。そこで、これらの土器の産地推定をするためには何らかの方法で母集団を設定しなければならない。考古学的型式分類に化学分析のデータを対応させて、母集団の設定を試みるのも一法である。

埴輪のように、窯跡が残っている場合もあれば、野焼きのため窯跡が残っていない場合もあるときには、須恵器のようにして産地推定をしたり、土師器などのように同じ化学特性をもつ埴輪をだす古墳を整理したり、また、同じ地域の須恵器の化学特性と比較したりして何らかの情報を引き出そうとしているのが現状である。

本項では出雲西部地域の古墳出土埴輪の分析結果を東部地域のものと比較しつつまとめてみた。

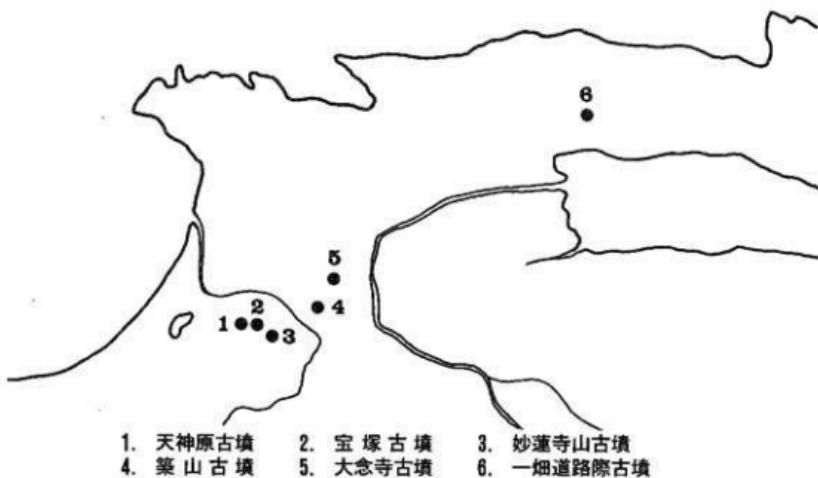


図13 試料採取古墳位置図

遺跡名	試料番号	器種	年代	K	C _α	Fe	Rb	Sr
天神原古墳	V-1 1 2	円筒埴輪	6c前～中頃	0.364	0.602	4.23	0.299	1.02
	1 1 3	"	"	0.289	0.289	3.65	0.242	0.769
	1 1 4	"	"	0.366	0.098	4.43	0.250	0.256
宝塚古墳	VI-1 1 5	円筒埴輪	6c後半	0.360	0.301	2.50	0.314	0.559
	VI-1 1 6	円筒埴輪	不 明	0.309	0.231	4.29	0.340	0.707
	1 1 7	"	"	0.319	0.261	5.20	0.243	0.732
大念寺古墳	■-1 1 9	円筒埴輪	6c中～後半	0.280	0.512	3.84	0.237	1.37
	1 2 0	"	"	0.284	0.639	4.23	0.222	1.35
	1 2 1	"	"	0.443	0.315	4.59	0.427	0.859
築山古墳	IX-1 2 2	円筒埴輪	6c後半	0.356	0.515	4.05	0.314	0.971
	1 2 3	"	"	0.400	0.217	4.04	0.468	0.663
	1 2 4	"	"	0.321	0.412	4.43	0.280	0.705
妙蓮寺山古墳	X-1 2 5	円筒埴輪	6c中～後半	0.329	0.395	3.84	0.313	1.11
	1 2 6	"	"	0.368	0.205	3.80	0.358	0.597

(分析値は岩石標準試料 JG-1 による標準化値である)

表 1 出雲西部地域の古墳出土埴輪の分析値

2) 分析結果

分析値は表1にまとめてある。この結果を東部地域の古曾志古墳、および、岩屋後古墳出土の埴輪の胎土と比較してみた。まず、図1にはFe因子を対比してある。Fe因子は須恵器でも組織的な地域差を表示する因子ではなく、K、Ca、Rb、Sr因子で分けられた地域内でもFe量の多い須恵器を出す窯もあれば、Fe量の少ない白っぽい須恵器を出す窯もある。この点でK、Ca、Rb、Sr因子ほど使い易い因子ではない。しかし、弥生土器や土師器などの窯跡が残っていない土器類では、Feの含有量が多く、Fe因子を目じるしにして分析結果を分類していくと、うまく整理できる場合がこれまでもしばしばみられた。図14をみると東部地域の古墳でも、古曾志古墳の埴輪には岩屋後古墳の埴輪に比べてFe量は少なく、Fe因子で明確に相互識別できることがわかる。これに対し、西部地域の古墳の埴輪はどの古墳のものもFe量が多く、ほぼ、岩屋後古墳の埴輪に対応し、古曾志古墳の埴輪とは完全に識別される。しかし、Fe因子を使って、西部地域内の古墳間の相互識別ができるかどうかは、一基の古墳についてもっと数多くの（20～30点程度）埴輪片を分析してみないと、何ともいえない。

図15にはRb-Sr分布図を示す。ここでも、古曾志領域、岩屋後A、B領域を示してある。西部地域のどの古墳出土埴輪もRb因子では東部地域のどの古墳出土埴輪にもほぼ対応する

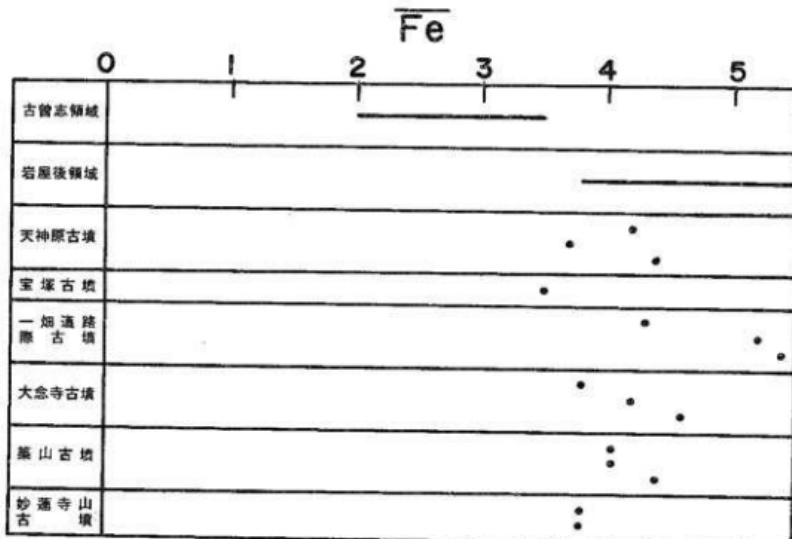


図14 出雲西部地域の2・3の古墳出土埴輪のFe量

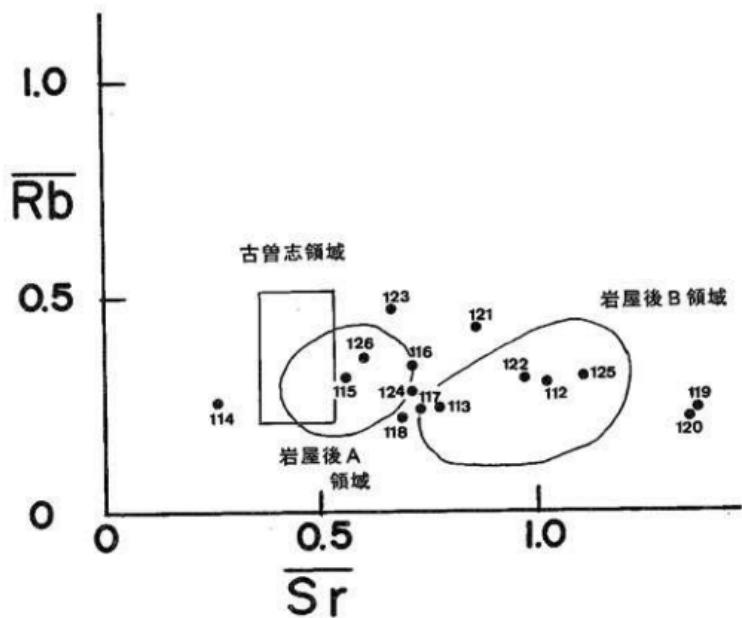


図15 出雲西部地域の2・3の古墳出土埴輪のRb-Sr分布図

が、Sr因子は大きくばらついており、その結果、古曾志領域に対応するものは1点もないことがわかる。また、岩屋後領域内に2・3点分布するものがあるが、果して、これらが岩屋後古墳の埴輪に対応するものかどうかは不明である。古曾志古墳や岩屋後古墳の広がりを参考にして図15を眺めると、西部地域の古墳出土埴輪も少なくとも数グループに分類されるものとみられる。一基当たりの分析点数が少ないので、表1のデータのみで分類することは危険である。ただ、図15を見る限り、一畠道路際古墳のNo.116、117、118は同質の胎土をもつとみられる。また、大念寺古墳のNo.119、120も同質の胎土であるが、No.121は大きくずれて分布し、異質の胎土であることを示している。このように、同一古墳には同質の胎土をもつ埴輪が検出されたが、異質の胎土をもつ場合もあることがわかる。図15をみて限り、むしろ、異質の胎土をもつ場合の方が多いことを示している。

図16にはK-Ca分布図を示す。この分布図ではRb-Sr分布図ほど広く広がって分布しないのが普通である。そして、縦軸(K因子)よりも横軸(Ca因子)に大きいばらつきがあることがわかる。花崗岩類、土壤、粘土、土器類、火山灰などのケイ酸系試料では通常、Ca因子はSr因子と正の相関性をもつことから、図15、16は理解できる。

以上の結果から、K、Rb因子では島根県内の古墳出土埴輪には大差は認められない。したがって、この両因子は埴輪の相互識別には役に立たない。しかし、前述したように Fe、Ca、Sr因子にはある程度の差異があるので識別因子としては使えることがわかった。例えば、古曾志古墳と岩屋後古墳の埴輪は Fe、Ca、Sr因子で、また、岩屋後古墳のA、B群の埴輪は Ca、Sr因子で相互識別される。出雲西部地域の古墳出土埴輪も、図15、16をみると、いくつかのグループに分類できそうに思われる。ただ、一基の古墳当たりの分析点数が少ないので、今回は分類をせずにおく。全体として眺めた場合、同質の胎土をもつ埴輪は少なく、少しづづれて分布している。同じ胎土をもつ埴輪が少ないということはこれらの埴輪が野焼き、すなわち、少しづつ離れたところの材質を使い埴輪を焼成したことを示

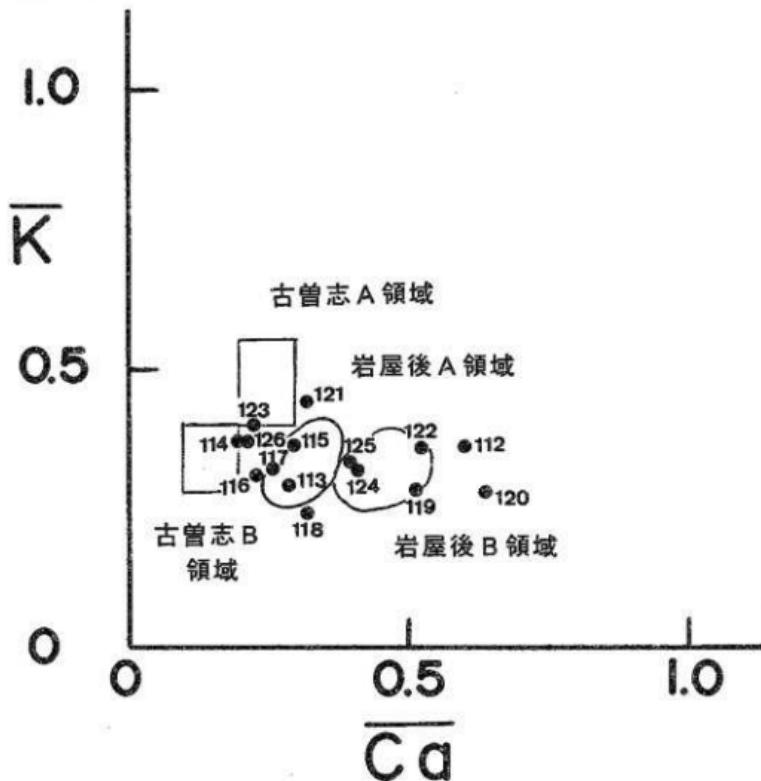


図16 出雲西部地域の2・3の古墳出土埴輪のK-Ca分布図

唆する。本来、埴輪を焼成するには須恵器のように登り窯を必要としない。埴輪を窯で焼成することの意味は須恵器のように量産が可能であることではないかと筆者は考える。したがって、埴輪窯が存在するということは、そこで焼成された埴輪を周辺の何ヶ所かの古墳へ供給したことを示唆する。このことをさらに拡大して考えると、一ヶ所の窯で集中して埴輪を焼成して供給できるだけの、その地域の豪族の組織化が進行していたことを示すものと考えられる。つまり、埴輪の伝播・流通の研究はその地域の豪族の組織化の状況を知る上に重要な情報をもたらす。

今回のデータを見る限り、畿内（大阪府、奈良県、京都府）、関東（埼玉県）に比べて、島根県内の埴輪の伝播・流通の度合いは低いことが認められる。ただ、この問題は急いでここで結論付けるのではなく、今後とも根気強くデータを集積していくことが必要であろう。

平成元年 3月25日 印刷

平成元年 3月30日 発行

**出雲市埋蔵文化財調査報告書
第 2 集**

発行 出雲市教育委員会
印刷 (株)武永プリント社